七戸町立鷹山宇一記念美術館

第4号(平成8年1月15日)

SUPORTERS CLUB NEWS

友の会 会報

TAKAYAMA-UICHI MEMORIAL MUSEUM OF ART

〒039-25
青森県上北郡七戸町字荒熊内67-94
七戸町立鷹山宇一記念美術館内
鷹山宇一記念美術館友の会
TEL 0176-62-5858 FAX 62-5860

美術館新館長に佐藤亘氏就任

昨年七月に逝去されました小原恭平氏の後任として、佐藤亘氏が鷹山宇一記念美術館の二代目館長として選任され、理事会での承認を経て昨年十一月一日に正式に就任されました。

開館一周年の昨年八月にグランドオープンを迎え、絵馬館・スペイン民芸資料館が開館した当美術館での今後のご活躍が期待されます。

この度、館長という大役を仰せつかりました。全くの門外漢である私にとって、ゼロからの出発と言うことになるのですが、皆様と何とか肩を並べ得ることと言えば、鷹山宇一先生の絵画が大好きであることと、美術館のたたずまいが嬉しいことと、七戸町がとても好きだということでしょうか。

先日、戸舘栄一課長さんと東京の鷹山宇一先生にご挨拶のためお訪ねして参りました。お顔の艶もよく、声も力があって話すごとに熱を帯び、いよいよお元気なご様子に、自分のいかに若輩者かを知らされるばかりでした。

美術館はオープンから15ヶ月で、入館者数が二万五千人を越えました。勿論企画展など集中した月もあったのでこんな数字になっていると言えますが、それでも大体平均して月千五百人位、一日で五十人程が訪れているということになります。

この数字は大変素晴らしいことで、皆様のこれまでの努力の賜物と言っていいのではないかと思っております。しかも、ありがたいことに、訪れた皆様が、異口同音に絵の素晴らしさ、絵馬館、スペイン陶器というバラエティーに富んだ楽しさ、窓外の風景の良さを褒めて下さり、中には心地よさや安らぎを感ずるとか、七戸の人たちの心意気を推し量れると言った人もおられ、嬉しい限りでありました。

それにしても、沢山の方々から愛されているこの美術館、町外の人々だけでなく、町の人々の誇りであり、一人一人の宝物としての美術館にまで、意識の高まることを願いながら、その期待に背かないよう工夫努力を積んでいかなくてはと思います。

どうぞ、沢山のお知恵を下さい。どうぞ、もっともっとお訪ね下さって、お力をお貸し下さい。

みんなの美術館のために。

七戸町立鷹山宇一記念美術館
館長 佐藤 亘

佐藤 亘 館長略歴

昭和二十五年 青森師範学校卒業
同年 野々上小学校教員
七戸中学校・七戸小学校において
十九年間七戸町で教員生活を送る
平成二年 東北町蝦沢小学校校長を
最後に定年退職
平成三年より七戸町社会教育指導員
現在に至る

平成八年の美術館展示計画 春季二科展の開催決定 (4/28~6/2) スペイン館・絵馬館常設展示

平成八年の美術館の展示計画案が決定されました。昨年好評をいただきました春季二科秀作展を本年も社団法人二科会のご協力により開催するほか、様々な企画展を開催する予定です。

友の会の皆様のご理解ご協力をよろしくお願いいたします。

なお、下半期の企画については現在交渉中・検討中ですので、決定しだいお知らせいたします。

七戸町立鷹山宇一記念美術館 年間展示計画

	1月	2月	3月	4月	5月	6月
絵画室1	鷹山宇一館収蔵作品展（油彩）1/12~4/26				春季二科展4/26~6/2	常設展
絵画室2	鷹山宇一館収蔵作品展（油彩）1/12~4/26				春季二科展4/26~6/2	常設展
絵画室3	鳥谷幡山作品展ー掛け軸・屏風（日本画）1/12~4/26				春季二科展4/26~6/2	常設展
ランプ館	常設展：19世紀後半西洋卓上ランプ（鷹山宇一コレクション）展					
絵馬館	小田子不動堂・見町観音堂奉納（国指定重要有形民俗文化財）南部小絵馬・羽子板展					
スペイン館	常設展：スペインアンティーク陶器コレクション展					
工房	美術教室：デッサン、ドライポイント				春季二科展4/26~6/2	

※1月8日~12日、4月27日、6月3日~6日は展示作業の為臨時休館致します

私流鷹山記念美術館活用法

奥山雅子

美術館ができて、早一年がすぎました。私は、下手の横好きで絵を描くのも、観るのも好きです。友の会の発起人の方から理事になるようにと頼まれたときはまさかと思いましたが、好奇心と私のような者でも役に立つならという気持ちで参加させていただきました。

暇を見つけて美術館に出かけて、そこでいろいろな人との出会いがあり自分なりの利用法で大変楽しんでいます。

十数年前まだ独身だった頃、青岩寺の二階に版画のギャラリーがありました。その頃も暇があれば訪ねていき、版画を観ながらコーヒーをごちそうになり色々なおしゃべりをして楽しんでいました。

とても気楽で気取らずにサロンのような雰囲気で、時にはお寺の中庭でパーティーをしたり、コンサートを企画したり、そこには年齢、職業を問わない色々な人達との出会いがありました。

絵を楽しむということは畏まって緊張して観ることではなく、気楽にゆったりとした気持ちで向き合うことがいいような気がします。そのうち自分の好きな絵が見つかり絵の意味や作者について興味がでてくるのではないかと思います。美術学校に行ったわけでもないので自分勝手な解釈ですが自己流の活用法です。

昨年、絵馬館とスペイン館がオープンしましたが、その中の陶器を見て漠然とこのスペイン陶器を使って、ここの中庭で野点のお茶会をやったら楽しいだろうなと、ふと漏らしたら その場にいた人達が「それはおもしろいヤレヤレ」と、からかいました。

実現するとは思っていませんが一風変わった美術館の活用法があってもいいのではないかと思っています。

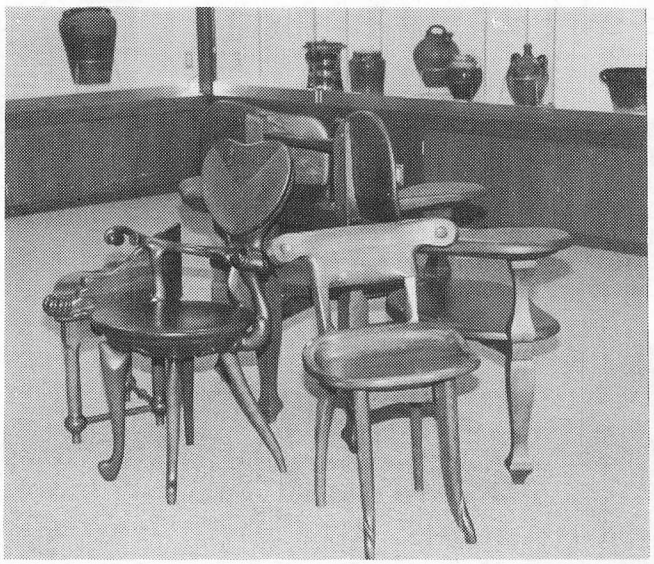
財団の常務理事の浜中先生は色々かわった発想の方ですので何かおもしろい企画を組んでくれるのではないかと期待しています。

友の会理事

相次ぐ協力活動

去る平成七年十一月五日、青森市在住の千葉和子さんに伴われて、元七戸小学校教員であったという赤田（旧姓高松）祐子（さちこ）さん（八十六才）が年金生活の中から少しでもお役にたてばと十万円を持参・ご寄付くださいました。

また七戸町の二ツ森守さんより学芸活動の基礎資料として、講談社発行世界美術全集（全二十五巻）の寄贈をいただきました。



指定寄付金により購入した
アントニ・ガウディデザインの椅子（スペイン民芸資料館）

心より御礼申し上げます。

さらに本年に入りまして、スペイン民芸資料館に展示されているアントニ・ガウディの椅子四点を、有志の方々の多額の御寄付とアート・フロント・ギャラリーのご厚意によって購入、美術館の備品とすることができました。

これで、資料館を飾る大きなポイントが名実ともに備わったことになります。

ご来館の折にはどうぞ存分に御鑑賞下さい。

会員登録の更新について

鷹山宇一記念美術館友の会は平成六年十一月に設立されましたが、当初より平成八年の三月末日までを初年度の活動期間と定めております。（友の会規約は会報第一号に掲載しております）

四月一日より平成八年度に入りますが、会員の皆様には引き続き会員登録を更新のうえ、美術館の事業への協力および相互学習に取り組んでいただきたいと思います。

会員の種別および会費は以前のとおりですので、三月末日までに手続き下さいますようよろしくお願いいたします。

なお、更新手続きは美術館において行っておりますが、七戸郵便局に口座を開設し振り込み用紙を発行していただくことにもなりましたので、直接来館できない方はどうぞご利用ください。

さらに、複数年度分を一括で納付される方には割引制度を適用いたします。詳しくは美術館にお尋ねください。

今後とも友の会ならびに美術館に対してご理解・ご協力をお願い申しあげます。

会費規程（規約第五条）

※一般会員
年額三千円
特典
無料入館券送付
入館料・ミュージアムグッズ割引
研修会・講演会・会報等の連絡

※特別会員（個人）
年額一万円
※特別会員（法人）
年額二万円
特典
会員証提示により入館無料
個人は本人と同伴一名
法人は本人と同伴三名
ミュージアムグッズ割引
研修会・講演会・会報等の連絡

備考　更新手続期間は前年度の一月から三月まで、四月以降は翌年の三月までが有効期間となります。

お問い合わせは美術館（62－5858）まで

「七戸町の春季二科展に寄せて」出展の先生方よりメッセージ

昨年の春季二科展の開会式典や展示指導のため、御来館された(社)二科会の会員の先生方より当館友の会のために、原稿をお寄せいただきました。紙面の関係で二回に分けて掲載いたしました。

最北端津軽を旅して

二科会評議員　栗山淳

春季二科展が青森県七戸町で開催されることになり、陳列のため当地を訪れることになった。奥入瀬の神秘的な新緑に感嘆しながら十和田湖畔を散策した。

まだ日が高かったが、山深い一軒宿蔦温泉に案内された。いかにも、ひなびた歴史を感じさせる昔づくりの宿で、歩くとギュウ、ギュウと木のきしむ音がした。晩年この地を愛し、蔦温泉で生涯を閉じた明治の文人、大町桂月ゆかりの宿でもあった。七戸町のみなさんと盃を交わした蔦温泉の一夜を忘れることができない。

折角、ここまで来て帰るのは、いかにも残念である。津軽に足を運ぶことにした。

津軽を訪ねるまで、津軽に対して最北端の荒涼としたイメージを抱いていた。しかし、実際に来てみて、そんな荒涼としたものを感じなかった。季節によって、それぞれの津軽があるのだろうが、いささか期待が外れた感じがした。津軽は、冬は雪でほとんど交通が途絶になるという。そんな季節の津軽には、私たちの想像のつかない。凄絶な姿があるのだろう。私はそんな津軽が好きである。

竜飛の宿についたときは、日が暮れるにはまだ早かった。二階の窓を開けると竜飛灯台が目の前にあった。早速スケッチをした。晴れた日には、竜飛崎から北海道の山々が望めるというので、翌朝を期待したが、生憎く曇りで冷たい海風が吹きつけていた。展望台から裏竜飛海岸に下りると、竜飛灯台がよく見える絶好の場所があったので、小屋傍で風を避けながらスケッチをした。

私のスケッチは、文字のない絵日記である。カメラにも独特の味わいと、表現はあるが、素人の私の撮った写真は迫力に乏しく、あくまでも参考で絵にはならない。スケッチの場合は簡単な、クロッキーでも克明に憶えている。これは数分間でも、自分の目というレンズで観察して、頭で整理して表現するからであろう。後でスケッチブックを開いてみると、その時のさまざまな思いがよみがえり、記録となって残っている。私はスケッチを大切にしている。

スケッチを終えて、竜飛漁港に行く途中、民家の中を通る階段がある。これが有名な歩行者専用の「階段国道」339号と宿の人から聞いた。竜飛から小泊へと足を伸ばす。途中小さな集落があったので、海岸に下りてみると、短い防波堤のようなものが一本ひょろひょろと海に伸びているきりの浜に、二、三トンのちっぽけな漁船がもやってあった。浜には船小屋の前に同じような漁船が何そうか引き上げてあり、船小屋の外に、漁夫たちの寝泊まりしているらしい小屋が数軒あるが、人影はなかった。

「漁師の番屋」と書いてある。まだまだ津軽には、ひなびた風景が残っている。最北端津軽の旅情を、たっぷりと感じながら私の旅は終わった。

七戸町の皆さんの御厚情を感謝します。

春季二科展で作品を前に語る栗山淳氏

筆者紹介

高野　譲　たかの・ひろし
一九三二年生まれ
岐阜県出身
東京芸術大学美術学部
八〇年二科会会員推挙

栗山　淳　くりやま・じゅん
一九三〇年生まれ
茨城県河内村出身
一九七〇年二科展特選
七四年二科会会員推挙

岡村謹史　おかむら・きんじ
一九四四年生まれ
静岡県静岡市出身
一九七七年二科展特選
八七年二科会会員推挙

絵画作品の見方

二科会会員　高野譲

絵の見方については、大分前になるがルネ・ユイグ著「見えるものとの対話」1955年刊（Dialogue avec le visible, Fiamarion, Paris）と言う名著がある。

上中下三巻からなる長大な著作だが、本当に絵画の見方を追求しようと思われる方はこの著作を読まれれば、抽象的な教養が絵画鑑賞の障害になっていることに気がつかれると思う。

特に写実主義的絵画を理解出きると考え、抽象画等の近代絵画がわからないと考える人々にとって、描かれた物体を確認することで作品の色彩、形状に感動や情緒を活動せしめるまでに至らないことが多くの要因となっていると思はれる。

画家にとって作品制作意欲の源泉は一人一人異なるので、創られた作品を理解するには、モチーフの理解なしには共感はないこととなるが、発想が秀れていても技術が併わないこともあるし、技術が秀れていても、発想が平凡であって時代を反影していないこともあり得るので、虚心坦懐に作品と対峙し対話をすることが絵画鑑賞のあり方ではないかと思う。

あまりにも多様な表現様式や思想の氾濫によって芸術への対応を真摯に行おうとする人が混乱するのも無理のないところであろう。

芸術には秩序もあり矛盾もあることを理解すれば、正確でなくても作品の思考、情緒意欲、理念の混在が作品に反影していても、秀作では鑑賞者になにか感得せらるる部分が必ず存在すると思う。

レアリスムとは、具象的に描かれたものだけが真実を伝えるものでないことを理解出来れば、絵画芸術は理解出来ると思う。

私自身は人間の生きる力、生活の歓びを描くことを喜びとしているので、近代絵画の表現とは縁が薄いのではあるが……。

結局、私が絵画の見方を真摯に追求しようとする方にぜひ申し上げたいのは、何にでも共感出来る人はいないことを理解すればいいと言うことだ。

理解出来ないことは恥でもなんでもないことです。「わからないことはわからないと言えばよい」私の絵の見方であります。

TOUCH

二科会会員　岡村　謹史

七戸春季二科展が、大盛況の中、五月二十八日終展を迎えた。

出品、陳列等に携わった己は、大きな喜びと感動を抱いた。それにつけ、七戸町住民の約半数の入場者を得る事が出来たことは、関係各位の努力もさることながら、美術館等ボランティアのチームワークの賜と、待ちに待った地域住民の多大で且つ本物の志向の表れ、と思う。

六月六日の出来事を話したい。

都内で用事を済ませ、帰宅すべく午後十一時頃、新宿駅ビルの地下道を歩いている時だった。小さな輪が目に入り、次の瞬間野次馬になりすましていた。

そこには、化粧をし、無表情に立ち、手・腕を曲げた外国人らしい姿があった。足下には「ごじゆうにわたくしをうごかしてください」と段ボール紙にひらがなで書かれ、その前には小銭の入った帽子が置かれていた。

貴方は察知が早く、分かってしまったと思う。そうなんだ。ピエロ様のパントマイムだった。

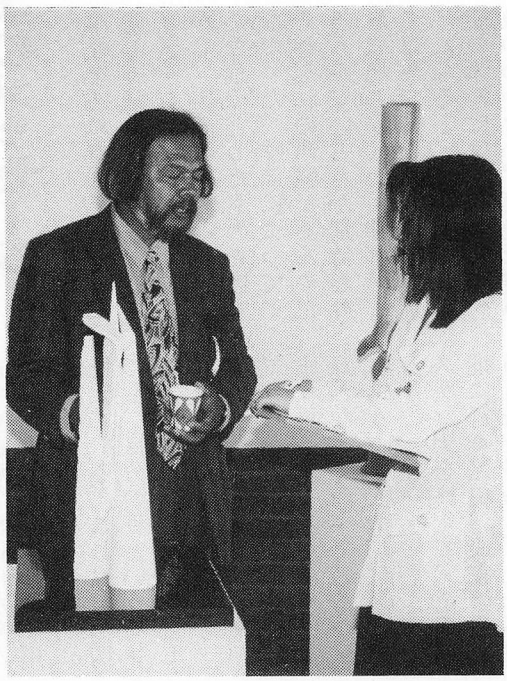
それは微動する様相もなく、興味があったのか、見取れていた処、会社員風の女性と二人の男性が、輪の中に入るや否や、その女性が笑いながら、茶目気たっぷりに、ピエロの手を上・下しながら、腕を取っては矢継ぎ早に形を変え、何ポーズ取らせたのだろうか、時間にして六十秒位だったか、大笑いしながら、三人連れは電車に乗って帰るであろう改札口の方に立ち去っていってしまった。

瞬時の出来事だった。私は輪の中の顔をしばらく見ていた。皆、唖然としていた様子に見えた。ピエロの目も彼女を追う。

矢継ぎ早にパントマイムする次の瞬間、皆大笑い。私には笑うことより怒りが先立ってしまった。さわっていい。動かしていい。足下にそう書いてある。さわり得って事かな。ピエロは芸人だ、さわられ、動いて、静止して、笑われて、芸を見せる事を仕事にしている。外国人であれ、日本人であれ。

ところで「ものつくり」に携わっている私、何時も制作中は作品とすべく常に手で触れ、指先に伝わるかすかな鼓動が、感触が、瞬間の動が・・・・。

幸にして出品する時点において、常々遊び相手となってくれれば、と思いながら我家から送り出している。



出展作品（SHOOTING STAR）を前に学芸員に語る岡村謹史氏

今回、七戸二科展に出展（SHOOTING STAR）した作品は、貴方に承知されていると思う白大理石である。槍の様な形をしている。

石と言うものは、扱い方によってはすぐ壊れてしまう。石を知る程に今回の作品のように、さわる事への恐怖感があり、その反面石を知る程に安全である事も事実である。

今回の展覧会場において、何人かの人達が「SHOOTING STAR」に触れたと思う。触れた貴方はきっと目で見ていた時と違った筈である。手に汗をかき。おもいっきりふれた人。恐々ふれた人。さぞ美術館の方々大変だったであろう。おまけに手汚れた作品をきれいに洗い落とし、我家に帰したのである。

何はともあれ、触れる事は、目で観るより素晴らしい、と日々口癖としている。

私は思う。観る人がめいっぱい作品と触れあえる。そんな展覧会が開かれたら、と。

驚き七戸再訪記

稲継由美子

私は、夫が七戸町の農林水産省奥羽種畜牧場（現在の家畜改良センター奥羽牧場）に勤務しておりましたので、七戸町に1984年から87年までの三年間居住しておりました。夫の転勤以来ご無沙汰しておりましたが、先日所用で青森県に伺った際にお世話になった方からこの美術館のことをお聞きして訪ねてみました。

周囲の自然環境と見事に調和した美術館のたたずまいと、その中に納められた鷹山先生の作品やランプ・絵馬・スペイン陶器・掛け軸等のバラエティに富んだ展示内容に本当に驚かされました。

七戸町で暮らしていた頃は、図書館の読書指導員や公民館の審議委員なども務めさせていただきましたし、親子劇場や南部裂織りの勉強会などの文化的なサークル活動にも参加しておりましたが、恥ずかしながら鷹山宇一画伯のことは全然知りませんでしたし、このような立派な施設を造り上げるような文化的なパワーが七戸町にあったとは全く気が付きませんでした。（関係者の皆様ごめんなさい）

私は現在東京に在住して演劇関係の活動に携わっておりますが、この美術館の中庭にあたるスペイン広場の雰囲気を生かして、野外演劇を企画できたらどんなに素敵だろうと感じながら館を後にしました。

全国から私と同様に、いろいろな方々がこの美術館を訪れると思いますが、皆さんそれぞれに私と同じ様な文化的な刺激を受けて帰られるのではないでしょうか。

思いつくまま勝手なことを書いてみましたがお許し下さい。

鷹山美術館のますますの発展と文化的なネットワークの広がりをご期待申し上げます。

平成八年一月